アグリテクニカアジアinバンコク

最新技術・機械が集結

大市場アセアンに期待

DLG（ドイツ農業協会）などの共催による「アグリテクニカアジア2018」が8月22～24日、タイ・バンコク市内のインターナショナルトレード&エキシビションセンターで開催された。海外28か国約300の企業が出展。トラクタやコンバインをはじめ、田植機や畑作畜産向け各種作業機、灌漑システム、再生可能エネルギー関連機器、ICTを活用したスマート農業製品まで多彩な製品が展示され、盛況の内に幕を閉じた。次回は2020年5月に開催予定。

「アグリテクニカアジア2018」は、野菜や果樹に関する資材や最新技術を展示する「Horti Asia2018（ホーティアジア）」と共催。そのため、トラクタや輸送車両、ハーベスタ、田植機といったフィールド機械だけでなく、灌漑システムや培養土、ハウス用資材といった多様な製品が一同に展示される総合農業展の雰囲気を醸し出していた。DLGと共に同展示会を主催したVNUエキシビションのワンヴァイサァ ウォンカシットプロジェクトマネージャーは「ホーティアジアは6回目、アグリテクニカアジアは2回目となる。今回出展した企業の多くが初出展。ビジネスチャンスを設けると共に来場者の皆様に新しい革新的な技術を触れていただくのが目的」と述べた。

また「近年タイでは機械化への関心が高まっている。それというのもタイの農業も労働力不足が顕著になってきているからだ。日本のように高齢化のためというより、労働者が仕事を求めて都市に流れてしまっていることが大きな要因だ。その労働力を補うべく農業機械を取り入れるが、機械を正しく扱う教育や啓発に関する取り組みも不足しているのが現状だ。このイベントが役に立てば嬉しい」と現状を語った。

会場ではAGCOやMASCHIO、KUHN、Fliegl といった欧州畑作機械メーカーと共にタイや中国、韓国などのメーカーが製品を展示。日本に進出していないヨーロッパのメーカーも数社見受けられた。また、日本以外にも中国、フィンランド、ドイツ、韓国、台湾、オランダの計7か国の国別パビリオンも設置されるなど国際色豊かなイベントとなっていた。

マッセイファーガソントラクタをはじめ、展示されていたトラクタ馬力は30～70psがメイン。また、作業機に関してはとうもろこし関連の製品が目についた。また、ドローンの展示も多く用途は主に防除。だが、日本のものとは異なり本体にスプレーヤのような竿に数個のノズルを取り付けるタイプが多かった。この他、精密農業機器メーカーも出展していたが、市場調査の色合いが強かったようだ。地元・タイのメーカーは、フロント部分にライトやスピーカーをふんだんに取り付けたデコトラのような派手なコンバインを展示していた。「タイ人は賑やかな機械が好き。輸出を含めて年間150～200台売れている」と笑顔で答えた。

会場スペースは昨年3月に開催された前回に比べて小さくなったというが、前回を超える来場者があったとのこと。出展メーカー各社に話を聞くと、「タイ国内とベトナムやミャンマー、カンボジア、フィリピンなどの周辺国からの来場者が半々くらいの割合。各国からの買付業者、行政関係者の来場も多く期待の大きさを感じた」との返事が圧倒的だった。

ワンヴァイサァマネージャ

緑産は〝サムライ7〟を展示

新たな市場の開拓へ

日本からも多数の企業が出展

北海道農業機械工業会（宮原憲会長）はジャパンパビリオン内にブースを出展。今回参加した会員企業はIHIアグリテック、石村鉄工、エフ・イー、本田農機工業の4社。実機展示は行わなかったが、IHIアグリテックはベールラッパ、石村鉄工はカルチベータ、エフ・イーは野菜洗浄機、本田農機工業は枝豆ピッカーや長ねぎ掘取機について英語やタイ語のパンフレットやカタログを用意した他、製品に関するビデオ上映等を行いPR。タイはもちろん、ベトナムの農業法人やスリランカの生産法人といったアジアのバイヤーやディストリビューター、有機栽培野菜や酪農関係の農家や関係者が多く訪問。一定の成果をあげた。

この出展を機に会員企業各社がタイ国内に有力なパートナーなどを得られれば、と竹中秀行北農工専務理事。「日本製の農業機械はどのようなものか、と見て興味を持ってもらうことが今回のテーマ。そういった面では多くの来場者に足を運んでいただき情報交換ができた。タイは初めての出展企業も多く、周辺国からも来場も多かったので日本製品へのニーズをはじめとする市場調査と共に現地で実力のあるパートナーを見つけ、連絡を取りあえる環境が醸成できることを期待している」と述べた。

オープニングセレモニー

各国から来た来場者で賑った北農エブース

ラビットモアなどを出展したオーレック

希望者を前に実演を行った大橋